

開催報告

令和5年度 教育文化・家の光 プランナー専修講座 (基礎編)

「教育文化・家の光プランナー」のJA職員のみなさまを対象に「JA教育文化活動」「教育文化・家の光プランナーの役割」についての学びを支援する専修講座(基礎編)を7月18日～8月31日の期間で配信しました。主な内容を紹介します。

●教育文化・家の光プランナーとは

https://kyouiku.ja-jirei-ienohikari.com/kyouikumagazine/202205_5/

メイン講義①



教育文化活動とはなにか？

—JA教育文化活動の意味と役割を学ぶ—

一般社団法人 日本協同組合連携機構 基礎研究部 部長
小林 元氏

■JAの組織と活動と事業を繋ぐ横糸の役割

協同組合は、願いや課題を同じくする人々が集まり、事業を通じて願いを叶え、課題を解決する、組合員が主人公の組織です。組合員の願いは、身体面、経済面、精神面、環境面、社会貢献、自己実現の6つに整理されます。社会貢献は、みんなと一緒に他者の役に立ちたいという協同組合として必要な願いであり、自己実現の願いとは、協同組合のなかで積極的に活躍していきたいという気持ちが生まれること。JAの事業や活動を通じ組合員が主人公となって願いを叶えていく、それを支えるのが教育文化活動です。



しかし現在のJAでは、組織と活動と事業がバラバラになっています。これら

を繋ぐのが教育文化活動の大きな役割です。組合員と組合員・地域住民を結び、J A職員と組合員・地域住民を結び、事業と事業・活動と事業を結ぶ3つの横糸の役割があります。

教育文化活動には、協同組合への理解を深めJ A運動を発展させるための「教育・学習活動」、組合員・地域住民の求める情報を提供し、J A・農業への理解を深める「情報・広報活動」、生活者としての願いや期待を実現しJ Aファンを増やす「生活文化活動」、J Aの最大の強みである「組合員組織の育成活動」の4つの活動領域があります。

■ J Aの主人公としての組合員づくりを支える

J A教育文化活動がめざすところは、アクティブ・メンバーシップの確立です。認知→利用→参加→参画。このステップアップをめざすことによって、組合員をJ Aの主人公として育てる仕組みづくりを支えるのが教育文化活動です。まず、J Aの事業や活動を知ってもらう。その第一歩が対話運動・訪問活動です。顔見知りになり相談を受けることができる関係になり、J Aの事業や活動に繋げる。そして、J A祭りや支店協同活動などで組合員同士を繋ぎ、組合員組織を育む。さらに学びの機会を通じて、運営参画や意思反映ができるJ Aの主人公を増やしていくことがプランナーの役割でもあります。

メイン講義②



教育文化・家の光プランナーの 役割とはなにか？

一般社団法人 日本協同組合連携機構 基礎研究部 部長

小林 元氏

■ J Aの仕組みとして教育文化活動を位置付け

プランナーには、「啓発者・教育者」「企画者」「実践者」「組織者」の4つの役割があります。協同組合の職員としての心構えを促し、先頭に立ってJ A運動の目的を伝えるエデュケーター、教育文化活動の戦略や基本方針・実施計画を策定し実績評価を確立するプランナー、教育文化活動プロジェクトのリーダーとしてJ A各部門を調整するとともに組合員組織を育成し事務局を担うコーディネーター、組合員教育の体制を築きJ A内での教育文化活動実践の風土をつくるオルガナイザーの役割が期待されています。

重要性が理解されていても活動が停滞しているのは、教育文化活動がJ Aの仕

組みとして位置付けられていないからです。事業計画に明示し推進体制を整備し、中心となるプロの能力を持つ職員を育成・配置して、プランナーだけではなく、全役職員が教育文化活動を重視する職場・組織風土をつくるのが重要です。

願いや課題を共有する人々が組織をつくり、事業を利用していくことでJAの経営は成り立っています。組織基盤はJA・協同組合の最大の強みです。この組織基盤にはいま、農業者の減少、准組合員の増加など大きな変化が起こっています。正組合員＝農業者、准組合員＝非農業者の認識では、組合員の願いや課題を汲み取ることができません。まず、多様な組合員像を明らかにし、異なる願いや課題、JAとの繋がり方を世代別に把握する必要があります。

■組合員の多様性見つけ、目的に合った活動を

これまでのJAの次世代対策は、40歳までの子育て世代を対象とした将来への種まきが中心で、働き盛りの40～55歳への対応が遅れてきたのではないのでしょうか。この世代は将来のボリュームゾーンの可能性を秘めたJA運営の未来の主人公です。組合員の色合いが明確に縦割りすることのできない、垣根が低くなっているグラデーション状態のなかで、一人ひとりの組合員に向き合い、願いや課題に耳を傾ける必要があります。プランナーには、こうした組合員のみなさんをしっかりと見つめることが求められています。

組合員の多様性を見つめる→多様な願いに応える活動をつくる→目的に合った活動を計画する→活動の成果を必ず確認する。この`C(まずは組合員の多様性をみつめよう)A(組合員の多様な願いに応える活動を)P(目的にあった活動を計画する)D(活動を行ったら必ず成果を確認)、サイクルをしっかりと回していかなければなりません。目的を明確にした教育文化活動は、JAの組織を強くし、事業や経営の源になります。プランナーは、JAを強く元気にする司令塔です。

経験者



教育文化・家の光プランナーを 経験して

JAしまね くにびき地区本部 常務理事本部長
越野 浩昭氏

■「適智適策」のプランニングを

地域農業振興は、その地域に見合った「適智適策」、地域の特性を生かした方策を講ずることがポイントだ



と思いますが、教育文化・家の光プランナーも適智適策のプランニングをすることがたいせつです。平成22年から教育文化・家の光プランナーを務め、以後、地区の活動拠点である教育文化センター「San・san館」の設立や教育文化活動実施要領の策定、「ふ

れあい課」設置による推進体制の整備、女性部組織基盤の拡充、女性大学設置や婚活支援などに取り組んできました。ポイントは、拠点・体制・女性組織・コラボ企画・地域振興支援です。組合員・地域住民から支持されるJAづくりへ、相続を中心とした相談業務の実施や、「燦燦会」設置による企業・団体との深耕、「地域つながりセンター」への参画による小さな協同の醸成などにも努めてきました。生き残るJAには組織力＝つながる力があります。このつながる力は、小さな協同から大きな協同へと広がっていく起点にもなります。まず、できることから始めてほしいと思います。

JAしまねでは、持続可能な経営基盤の確立・強化に向けて、農業者・地域住民と一体となった協同活動の取り組みを運営方針に掲げ、くらしの活動、広報活動、地域貢献、地域活性化への取り組みを展開しています。くらしの活動の実践に当たっては、女性部・青年組織・支店ふれあい活動の展開や教育文化活動の場づくりに努めています。その実践には、教育と組織の充実が欠かせません。まずは学習する職場風土づくりを始めとした職員教育、活動への参加・参画の仕掛けをつくる組合員教育、そして特に女性組織の充実です。

■ JA職員は「風の人」、「土の人」である農家とのつなぎ役

教育文化活動は、「役職員」「経営」「組合員・地域生活者」の三方の鼎立(ていりつ)した側面を接着剤のように結び付け、絆づくり、縁結びの役割を担っています。「大きな協同組合の中に、小さな協同をつくる」ことが、新しいJA像を切り拓くといわれますが、“JAの洗濯”には教育文化活動という洗剤をおすすめします。

組合員や地域住民の願いや期待を実現する活動への「賛同」から、一人ひとり


所 信

第8回通常総代会（令和4年6月26日開催）資料掲載

JA自己改革の継続実践と適智適策を講じた協同組合運動への進展に切磋琢磨してまいります。

3つの所信

広報誌「しまねびより」
8月号掲載



1. 県都松江市の地区本部として、JAしまねの中核を担うとともに、松江市農業の振興と農業所得の増大、地域振興の積極的な実践を目指し、引き続き事業改革を進め事業収支の黒字化を確保してまいります。
1. 不祥事のない健全な経営を行ってまいります。
1. 燦燦と輝く、明るく元気で差別の無い職場風土と働きやすい職場環境づくりに取り組んでまいります。

の「参加」へ。JAの持ち味を発揮した教育文化活動の実践は、プランナーの腕の見せどころです。

JAの職員は「風の人」、「土の人」である農家とのつなぎ役。その風が吹くためには、自ら誇れる仕事として教育文化活動の源である家の光事業を好きになり、巧みな仕掛けをしていくことが大事です。風が吹く地域は10年後も組合員・利用者・JA役職員が元気で、夢をつないでいると思っています。

● JAしまね くにびき地区本部Webサイトは[こちら](#)から

専門講師



教育文化・家の光プランナーに期待する

JA教育文化活動専門講師

原田 晴男 氏

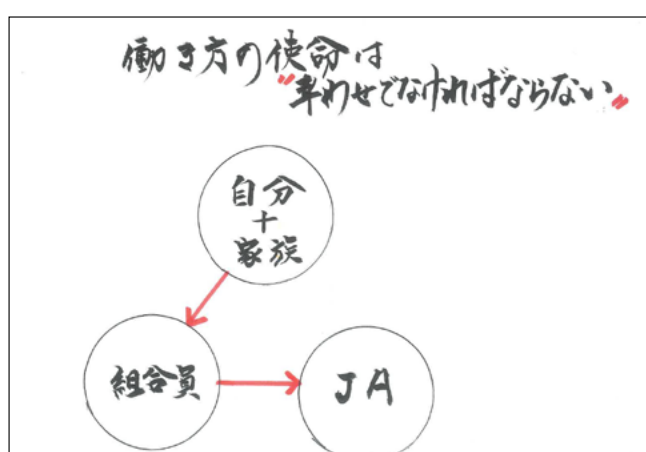
組織基盤は食と農を軸としたアイデンティティ

JA自己改革が進み、支店(所)の再編・統廃合、大型化が進むなかで、組織基盤強化の必要性が問われています。地域のよりどころとしての機能を保つための拠点配置や方向性が今、必要とされています。その支店(所)が実質的に、組合員と共に歩んでいける組織基盤、地区との関係性を強化し、職員が働きやすい環境をつくる必要があります。店舗再編は、単なる経営の合理化や収支改善ではなく、あくまでも機能強化を目指しています。組合員



をはじめ、地域の利用者にさらなるサービスの提供をはかることが重要です。

組織基盤のよりどころは、食と農を軸としたアイデンティティの確立です。「農は国の宝、食は人の命なり」という言葉を忘れてはなりません。組合員組織に入り込んで組織をリードし、コロナ禍から脱却した本



来の事業のあり方を確立することが今、求められています。働き方の使命は「幸せ、でなければなりません。自分が幸せ、家族が幸せ、組合員が幸せ、そしてJAが幸せ。この順番だけは忘れてはなりません。

■事業活動の中にある学びの機会を逃さない

時代の様々な流れを自分の中にどう組み入れていくか。プランナーのみなさんが中心になって進めていかなければなりません。学びは常に活動のなかにあります。先進事例を組み入れた対策も一つの手法です。プランナーはJAを教育文化活動で支えるプロフェッショナルです。

情報収集し全国のJAに学ぶ、プランナーの強みを活かす。内外に仲間をつくり様々な発想を取り入れる。そして、組合員の中に入って声や願いを聞き、組織育成する。事業活動のなかで自分の周りがある学びの機会を逃さないことが大切です。組織基盤強化を牽引するのはプランナーのみなさんです。地域に根ざし地域の中で取り組む、あなたにとっての教育文化活動を、今一度考えてみましょう。